



クローバー動物病院 だより 第26号



今回は、うさぎ⑥についてです。

うさぎ⑥

うさぎシリーズの最後は、皮膚の疾患についてです。うさぎは非常に皮膚が薄くデリケートであるため、湿った状態がつづく、すぐに皮膚病になってしまいます。また、細菌感染による皮下膿瘍もよく認められます。

うさぎの皮膚病

1 うさぎの皮膚

☆**高湿度に弱く**、湿性皮膚炎が好発します。

☆**表皮は非常に薄く損傷に弱い**特徴があります。特に細菌、真菌、寄生虫（ダニ、シラミ、ノミ類）などの感染性皮膚疾患が好発します。

2 うさぎの被毛

☆被毛は自ら毛繕いを行い、清潔に保ちます。

☆特にうさぎの被毛は^{ほりせい}**撥水性が強く**、積極的な入浴やシャンプーの必要性がありません。

湿性皮膚炎



←上顎の歯のトラブルにより流涙し、
眼周囲の毛が脱毛している



←下顎の歯のトラブルによるよだれで
口周りから頸部にかけて発症



←肛門周囲に発症したうさぎ

皮下膿瘍



←頬部に膿瘍が認められるうさぎ
手術により、膿瘍がつつま
れている膜ごと摘出している様子



☆夏と冬の前にそれぞれ換毛がみられますが、飼育個体では時期がずれることも多いです。

☆妊娠個体では出産間際に乳首付近の被毛を自ら抜いて巣箱に敷くような生理的な抜毛もみられます。

☆なおウサギには肉球がありませんので足底部の皮膚を損傷しやすいです。

3 アイランドスキン

☆特有の皮膚の現象で、皮膚が部分的に肥厚して、その部分の毛の発育が早くなります。原因は不明ですが、遺伝的、季節的、あるいは換毛の時期と関係しているともいわれています。

4 臭腺と肉垂

☆顎部と肛門部と鼠径部に臭腺を有します。特に鼠径部には、黒色や茶褐色の分泌物が顕著に蓄積しています。

☆メスには頸袋（けいたい）、肉水（にくすい）、肉垂（にくだれ）などといわれる頸部の皮膚のたるみがみられます。これはオスにはほとんどみられませんが、あったとしてもそれ程大きなものにはなりません。

皮下膿瘍

ウサギでは細菌などによる感染で化膿した場合、イヌやネコのように液状ではなく、**チーズのように固まった膿瘍**が発生します。原因菌の進入箇所の外傷部や疾病の起因が特定できないことも多いです。

1 症状

- ☆ 外観上は皮膚に**膨らんだ塊**として確認されます。
- ☆ 症例によっては患部の皮膚に**発赤や脱毛**がみられ、膿瘍は痛みを伴わず、元気、食欲などの一般症状に問題はみられません。
- ☆ 重篤な症例では、原因菌が血行を介し全身に転移し、**敗血症**を引き起こすこともあります。
- ☆ 膿瘍は皮下以外にも筋肉、関節、脳、消化管、生殖器などさまざまな場所に発生します。
- ☆ 顎部に発生した症例は、**不正咬合**による根尖膿瘍が原因であることが**多く**、回復が困難な場合もあります。

2 治療

- ☆ 内服薬のみの治療では効果は期待できないので、**外科的に処置を行う必要性**があります。
- ☆ しかし、被嚢形成がみられ、完全摘出が可能な場合以外は、原因菌が深部や他部分位に潜在し、**多くは再発や転移**がみられ、完治が望めない症例が多いです。したがって、**長期にわたる抗生物質の投与**が必要な場合もあります。

うさぎの皮膚



←体全体に換毛がみられているうさぎ



←自らの毛を抜いて巣づくりしている母うさぎ



←毛刈り後、アイランドスキンにより、毛の発育に差がみられている



←うさぎには肉球がないため、後肢の足底を痛めやすい。このうさぎは軽度の潰瘍がみられる。